

【秀句鑑賞】

菜の花や島へ繋がる橋ひとつ

明美

叙景句の本髄をいく俳句である。手前の大きな陸地とその先の島が一本の橋によって繋がっている状況は、日本全国どこにもある見慣れたものである。これをあらためて句に詠んでも常套句の域を出るのは難しい。掲句を純度の高い本格的な俳句にならしめたものは、季語「菜の花」の斡旋である。大きな陸地と小さな陸地（島）との間を繋いでいるものは、橋だけではない。

より大きな存在として菜の花があるのを作者は見出したのである。菜の花畑を抜けた一本の道路が橋に繋がりに、この橋が島に繋がっているのである。まるで希望や夢を象徴する一面の菜の花に導かれて目的の島に到達するのである。

【秀句鑑賞】

啓蟄や歩巾大きく小買物

友子

「歩幅大きく小買物」のフレーズは、大と小との言葉の対比を詠みこんだ巧みなものであるが、これだけではレトリックが巧い句に終わってしまうところであるが、掲句の称賛すべきところは、季語「啓蟄」との配合の妙である。

啓蟄は冬に地中に籠った地虫が春の暖気に誘われて地面に現れ出てくることを言うが、暖かくなるとそれまで余計な外出を控えていた人たちも、外出を喜んでするようになる。小買物と言っているが買物に主眼があるのではなく、買物物は二の次で、歩幅を大きくして颯爽と歩き回りたい気分主眼があるのであろう。

【自句自解】

告別の声の気丈や花馬酔木

守

齡を重ねるにつれて人との永遠の別れの場面に立ち会うことが増えてくる。悲しみに堪えて絞りだすような告別の言葉をじっと聞いているとき、逝く人との思い出がフラッシュバックのように脳裏を過る。別れを告げる声の主が気丈に振舞っているのが解れば、なおさらに悲しみが増幅される。庭の片隅の花馬酔木は、その独特のかすかな匂いで告別の場を包んでいた。

【秀句鑑賞】

覚えなき人の目礼暮の春

幸

何かの会合で、あるいは擦れ違いざまにふと目札を受けることがある。反射的にこちらも目札を返す。しかし後から何度考えてみても、その人物の名前は勿論として、その人物と自分との係りを思い出せない。おそらく、相手の人もそうなのかも知れない。

人は、相手の人に少なくとも敵意は持っていない証しとして、ひとまず目札を交わし合うのであろう。恐怖なのは、目札を交わした後、相手が立ち止り、話しかけて来たときである。暮の春という季語の選択がよい。

【秀句鑑賞】

春耕の翁の鋤の光りをり

ツル子

俳句では「翁」と言えば芭蕉のことを指すのであるが、掲句では通常の意味通り老人である。今は機械化農業が進展し、自家農園でもなければ鋤をふるう姿を見ることは少ない。故郷を出て行ってしまった子供たちのあるかなき帰郷を待っている年老いた親たちが、僅かに残してある畑で鋤をあつかっているのであろう。丁寧に手入れされた鋤の刃先の光は何を言いたいのだろうか。

【秀句鑑賞】

会合の通知つきつき春深し

溪水

四月は年度初めの月である。色々な団体やグループの年次総会などが数多く開かれる。会合の通知が多いということは、それだけ社会との交わりがあるということであり、年をとればとるほど、社会との接点を多くもっていることは、人生を豊かにするという意味で大事なことである。ゆるやかな結合のグループという点において、俳句会への参加も一定の役割を果たしているのではないだろうか。

【秀句鑑賞】

てれ笑ひ丸ごと新品入学す

ツル子

小学校の入学児童のてれ笑いであろう。評者の小さい頃は、新入学と言っても上の兄弟や親類縁者からのお下がりが多かった。それでも恥ずかしさは感じなかった。戦後の復興期はみんな貧しかったからである。

デフレ不況といっても、そこそこの衣食住が保証されている現在の若い親たちの多くには、「お下がり」はもはや死語なのであろう。まして少子化の時代環境においては、「丸ごと新品」は当たり前なのであろう。新入生が「お下がり」や「極貧」ということを知るのには、教科書の中だけであってほしい。

【秀句鑑賞】

たんぽぽに名札持たせり植物園

秀一

蒲公英の傍に立っている名札を、蒲公英が自ら持っている、蒲公英が持たされていると言ったのである。一木一草にもれなく名札をつけてある植物園ならばこそその一句である。主客転倒させたものを見方をすると、意外な効果があるという証左でもある。

【秀句鑑賞】

原発の冷温停止つつじ燃ゆ

守

冷温停止の終結宣言は、ネズミ一匹が起こした短絡事故によって大きく揺らいでいる。事故前も事故後も原発の安全神話は、ガラス細工のような脆弱性のベースの上に築かれている。あたふたとした人間界とは無関係に、躑躅は燃えている。

【秀句鑑賞】

ざはめきの花見に眠る赤子かな

明美

花冷の時期ではないことを願うが、桜を楽しんでいる親が押している乳母車の中で赤子は、周囲のざわめきをもとせずに寝ている。視線が赤子に行った作者の眼力の確かさに敬服する。現代俳句では、花を見て花が美しいと詠むだけでは、足りないということである。

【秀句鑑賞】

ハイカーを吐き出す駅や春の空

溪水

本格的な登山ならば、季は夏であるが、険しくない野山を歩き回るハイキングであれば、季は春がよい。

「吐き出す駅」と言うことによって、電車で満員のハイカーが続々と駅ホームに降り立つ風景が目に見えかぶ。春の空という季語の置き方が良い。これによって、ハイカーが春の野山を満喫してその一日を過ごすであろうことが、予期される。

【秀句鑑賞】

暮れ泥む町に大きな春日輪

ヤエ子

夕暮の町が春の日輪に照らされている。よく見かける光景であるがなかなか俳句にまと

めることは難しい。

掲句が成功した理由は何かと考えたら、「暮なずむ」の表記における工夫にあるものと思つた。「泥む」という漢字を用いることによつて、暮時の春日輪の性状がもの見事に言いあてられていると思う。

【秀句鑑賞】

春の街。ペロンチーノ昼餉とす

真三

真三さんの句は持ち前の健脚を武器とした散策の途次で生まれることが多い。観念で抽象的な句を作り上げるのではなく、しっかりとした観察と体験・実感の土台の上に句を立ち上げるのである。ペロンチーノはパスタ料理の一つであるが、春の陽に溢れている街角のイタリアンレストランに足を休め、ゆっくり寛いだ昼餉のひとときを過ごしている作者の姿が目も浮かぶ。

文責 代表 増田 守